

品川支部

令和元年7月1日発行
〒141-0022
品川区東五反田1-8-5
Tel. 3442-7075

7月

天理教品川支部（豊英分教会内） 発行責任者 栗原薫 編集 支部編集部

婦人会創立百十周年 会員決起の集い開催中

昨年の大がかりな『婦人会総会百回』のイベントに続き、今年は来年の婦人会創立百十周年に向けて、各地で決起の集いが催されています。品川支部内では六月に二箇所の大教会で開催されました。

十六日には本荏大教会で、又二十三日には日本橋大教会を会場に支部内からも大勢の会員の方にお集まり頂きました。

加えて教会長さんを始め、発表をされた方、青年会の方等、お手伝いをして頂き盛大な内に進める事が出来ました。この後も、東京教区管内で続きますので、まだ参加されていない会員の方もどうぞご参加下さい。



日本橋大教会神殿にて



☆支部行事のお知らせ

・支部例会七月二十一日(二頁参照)

・神名流し

一日(月)十時から、大井町駅前にて

・在宅センターひのきしん

七月三十一日(水)午前九時半〜十一時

・三味線・お琴等お稽古受け付けます(随時)

支部内で三味線・お琴を習ってみたいという方みかぐら歌以外のお稽古も出来ます。師匠が楽しく楽器の扱い方から教えてくれますので、希望の方個人でもグループでも表紙の豊英分教会まで連絡下さい。

☆教務支庁からのお知らせ

・子供おちば帰り

夜のバレードは今年限り
以前はプールサイド行事から、かわつての三十数年最後のバレードを見に行きましょう
又来年からは、もっと中身の充実を図り日数も八日間で中身の濃い催しになります
バレードも、他の内容もどんなになるか楽しみに。

・おさづけの理

真柱さまにおかれましては、月次祭での参拝のお姿でも、ご回復の様子が月を追ってうかがわれます。おさづけの拝戴も、一日3名から始まり現在は十二名の方にお出し頂けるまでになったとの事ですので全快もまもなくと思われるます

・支部婦人会から
新しい主任で初の婦人会です

一般の方、お道が浅い方にも解りやすいお話を、児童・民生委員でもある支部長の栗原先生にお願いして、母と子のつながりと、悩みの解決方法をテーマにお話頂き、その後は茶話会でお楽しみ企画です。
是非大勢の方の参加をお待ちしています。男性の方もどうぞ
石田ゆき

・子供おちば帰りの手段が無い方

直属が東京に無い方、親が時間がない方
東京教区でバスが出ます。
又、支部内の教会でも何軒もの教会が企画しておりますので是非ご相談下さい

・手配り協力者募集

皆様の協力で品川支部は教区内平均を大きく上回る90%を超える手配り率を保っております。その中でこのところ欠員が出ておりますので二、三軒でも協力頂ける方を募集しておりますので宜しく願います。
各地区組長さんに連絡下さい。

| 拠点教会 | 7日号 | 14日号 | 21日号 | 28日号 |
|------|-----|------|------|------|
| 日本橋 | 手配り | 手配り | 手配り | 直送 |
| 本荏 | 手配り | 手配り | 手配り | 直送 |
| 南泰 | 手配り | 手配り | 手配り | 直送 |
| 三ツ木 | 手配り | 手配り | 手配り | 直送 |
| 水豊田 | 手配り | 手配り | 手配り | 直送 |

時報手配り七月予定

品川支部例会

令和元年7月21日 (日) 11時開始

場所 南泰分教会

(品川区東品川一丁目二九の六)

*こどもおちばがえり時期で21日に変更です。選挙日ですが宜しく

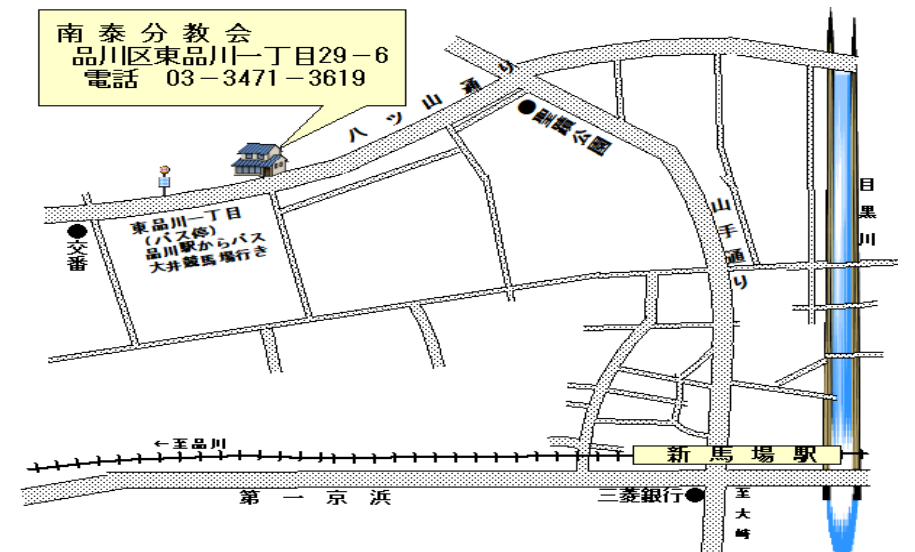
内容 おつとめよろづよ八首 七下り目

東京教区、支部連絡事項

当該教会長宮坂先生 挨拶

昼食の用意頂いてます

*各教会の方のほかどなたでも (白足袋ハッピー着用)



私の信仰

成東分教会長 三本真



私は修養科・検定講習を修了した後、一九才の時に、教祖百年祭を向かえる前年の4月に、御本部境内掛を勤めさせていただきました。(教祖百年祭執行(1)26(2)18)。帰参者二百万人) おちばでは教祖百年祭へのたすけふしんとして、現在の東西礼拝場・神殿の上段改修のふしんが完成されておりま

した。当時自動車の免許を取り、同級生の友人と湘南方面にドライブに向かう第三京浜で、百二十キロ近くのスピードで走行していて、前方の車の急なブレーキに、友人が運転する自車も急ブレーキ踏んだと同時に自車はスピンして、中央分離帯、路側帯の壁を交互に二、三回衝突し、かなりの衝撃を受けたあと、自車は横向きで3車線の真中に、前方を登坂車線ほうに向けて停車した。

助手席に座っていた私の寸前で後方車が急停車した。友人も私も双方の無事に安堵し、注意して車外に出て、自車の前方から大量の煙と、前方後方がかなり大破した状態を見た時に、日ごろ何気なく耳にしている教会での会話での親神様は「大難が小難に、小難が無難に」と通らせていただけると、いう言葉が脳裏を浮かんできました。事故処理などで、いろいろとご迷惑をお掛けしたことは申し訳ないことでしたが、単独の事故と怪我人が出なかったことに、お道の教えはまだまだ大きな御守護をいただいたと感じました。

そんな折に、祖母から、「大教会から教祖百年祭三年千日の旬に、孫さんを境内掛にどうかと言われたけど、一年間おちばで伏せ込んでみた」と言われました。事故のことなどもから、普段は逆らっていた私も思案することがあり、素直に受けさせてください、境内掛の勤務をさせていただきます。おちば神殿の近くでの境内勤務では、私がお道を通らせていただく上での基礎となる、

教理の面や生活面などいろいろと勉強させていただいた時だと思えます。神殿のお守りやひのきしん、また、山本利雄先生が境内掛本所で月に1回ずつ行われた「元の理」の講義が、それまでに自分の小さな頭の中で考え感じていたお道の教理を、大きく覆され感動させられたことを思い出します。そして年が変わり昭和六一年一月二十六日、教祖百年祭の当日、私の立哨の位置が東礼拝場南側の境界前に朝からおつとめ終了までの4.5時間勤めることになりました。立つて甘露台づとめをされる参拝者の方々に、座っていただけるように促すことや、百年祭期間中は、東礼拝場南側には、政財界・学者などの来賓の方々専用、絨毯を引き五十席くらい椅子席が設けられていて、その方々への御手洗い場所の案内などを仰せつかりました。確か一月二十六日には、当時の内閣総理大臣、松下幸之助氏などが参拝されておられました。

私はその錚々たる顔ぶれと、百年祭おつとめ前の独特雰囲気、緊張しながら立哨している中、合図木の音とともに、甘露台づとめが始まりました。この日は、明治二十年陰暦正月二十六日の如くに、最低気温マイナス3.2度(気象庁データ)で極寒で、甘露台には、バラバラと雪が降りてきました。甘露台を囲んでつとめられておられるつとめ人衆の方々のおつとめ着にも、雪がおりておりました。その中にも、何ともいえない陽気な勇んだおつとめと鳴物の音色、本来の境内掛としての勤務を忘れて拝していた、おつとめの光景が今でも私の心に焼き付いておられます。

また、甘露台づとめを勧められた当時の三代真柱様が、極寒の中、雪で濡れていたおつとめ着のまま、十二下りのおつとめ終了まで、神殿真西の柱の前に正座された御姿に、教祖が定命を縮めてまでおつとめの完修せき込まれたおもしろい、その方分の一くらいですが、自分なりに感じさせられた経験となり、自教会や上級教会でおつとめを勤める姿勢の定規でもあり、自分への反省にもなっております。